私学の魂

洗足学園
中学高等学校

対話型授業を深化させる授業改革で発信する時代のアウトプット力を強化! 再考を求め、挑戦し続ける教育が生徒たちの可能性を大きく拓く

社会の要請に応えて教育のあり方を柔軟に変え、「女性の自立」に対する答えを模索し続ける洗足学園中学高等学校。その姿勢が評価され、毎年多くの受験生から高い支持を集めています。2012年度には高3までの5教科必修体制と、50分授業・週6日制で授業数を増やして全教科対応のカリキュラムとし、学際的な学力の養成を目指してきました。その成果は、難関大学や医学部への合格者を順調に伸ばしている進学実績に表れています。

2015年度に着手する授業改革は全教科対応を維持しながら、対話型授業の深化を目的に授業時間を65分に延長し、グローバル時代に求められるアウトプットの力をさらに鍛えます。強化横断型の学力の土台となる総合学習は、月1～2回、土曜日の午前中にまとめて履修するので、腰を据えて取り組めるようになります。

“人生の母港”としての学校づくり「Mother Port School」構想の一環として卒業生を対象にした「就職活動支援セミナー」を開催するなど、洗足学園は独自の取り組みが目を引きます。生徒ひとりひとりの可能性を広げるために日進月歩の深化を続ける洗足学園の次の一手について、入試広報委員長の玉木大輔先生にお話しを伺いました。

入試広報委員長　玉木大輔先生

DATA 1

洗足学園中学高等学校

沿　革　1924年　前田若尾が学園の前身である平塚裁縫女学校を設立
1947年　洗足学園女子中学校を設立
1948年　洗足学園女子高等学校を設立
2002年　学校の名称を現在の洗足学園高等学校・中学校と改称
2011年　高校での募集を停止して完全中高一貫校に

校　長　前田　隆芳
所在地　神奈川県川崎市高津区久本２－３－１
TEL: ０４４（８５６）２７７７（代）
http://www.senzoku-gakuen.ed.jp
交　通　JR南武線「武蔵溝ノ口」駅または東急田園都市線・大井町線「溝の口」駅より徒歩８分

授業時間を 50 分から 65 分に延長 生徒からの発話を引き出し 自分で考え、発信する力を鍛える

洗足学園中学校高等学校は、2015 年度から授業の枠組みを大きく変え、授業時間を 50 分から 65 分に延長し、授業週 5 日・学校週 6 日制に移行します。そのねらいを、入試広報委員長の玉木大輔先生は「対話型授業の深化にある」といいます。「本校はこれまでも吸収した知識を活用し、自分の考えを発信することを求める対話型授業を展開してきました。ただ、50 分授業では知識を活用するところまでなかなか至らなかったことも否めませんでした」

ここのところ洗足学園の授業時間は、70 分、60 分、50 分と短縮していました。2012 年度の授業改革では、60 分・週 5 日制から 50 分・週 6 日制に移行することで、授業をより細かく分割して 25 コマから 34 コマに授業数を増加。「このときは、将来の文理廃止を見据え、枠にこだわらず全教科を学ばせたいという本校の方針に沿い、いろいろな教科をまんべんなく振り分けることを優先しました。ただし 50 分という時間の制約上、授業が知識の吸収に偏る傾向にあったのも事実です。これでは自分の意思を相手に明確に伝えるなどグローバル時代に求められる知識の活用と創造、そしてアウトプットする力は育ちにくい。そこで今回の改革では、授業時間を 65 分に延長することで生徒からの発話をさらに引き出します。双方向のやり取りを活発にすることで、生徒が自分で考え、発信する力をさらに鍛錬します」（玉木先生）

では洗足学園の対話型授業とはどのような授業なのでしょう。玉木先生も教鞭をとる国語では、中 1 からディベートやディスカッション、プレゼンテーションを数多く取り入れ、生徒は自分の頭で考え、自分の意見を相手に伝わるように発表するのが授業スタイル

ネイティブ教員との授業はまさに「対話型」。グローバル時代に求められる積極性とアウトプット力を育みます。

数ある学校行事の中でも生徒たちが一体となって盛り上がれるのが体育祭。可憐な演出も女子高ならでは！

として定着しています。例えば小説ならば自分たちで脚本を書いて演じるのです。中 2 では「走れメロス」のサイドストーリーを創作。登場人物の心情変化や風景描写との結びつきなど、読み取ったことを脚本の制作に反映させます。この作業は言語技術にも通じています。

では、対話型授業の深化によって授業はどのように変わるのでしょうか。「生徒達が今まで以上に自らの頭で考え、知識を活用し、知を創造していくことが必要になります。知の活用、創造に一層力を入れることで知の吸収もより確固たるものにします。対話中心の授業になれば、知識の吸収は自習に負うところが大きくなります。予習をきちんとやってこなければ授業で発話できませんから、同時に iPad など ICT 機器を駆使した授業や家庭学習を行う必要も将来生まれてきます。学内の無線 LAN 環境の整備をはじめとした ICT 機器の環境の整備は数年計画で順次進めていく方針です」（玉木先生）

土曜日は総合学習や「教養講座」で 教科横断的な学びを実践 他流試合参加など自由に活用

現在の予定では 2020 年から大学入試センター試験に代わり、「発展レベルの到達度テスト」が新設されます。導入が検討されている複数の教科、科目にわ

身近な人々から大学教授まで！キャリア教育に力を入れる洗足学園では学年ごとに様々なガイダンスが催されます。※写真は大学教授（左）と生徒の母親（右）による講演会。

９月に行われる洗足祭では楽しい企画がもり沢山！是非一度、足を運んでみてください。

たる「合科目型」、教科の枠組にとらわれない「総合型」テストについても、洗足学園が実践する対話型授業であれば十分対応可能なはず、と玉木先生はいいます。「中２の国語の授業で脳死をテーマにしたディベートでは、脳死とはどのような状態なのか生物学の知識が必要になります。脳死を倫理的、哲学的観点から見るとどんな問題点があるのか、そもそも日本の法律上、脳死が死として認められているのかどうか法学の知識がなければ論じられません。知識を活用する対話型授業の深化によって、合科目型の学力も養うことができるのです。」

来年度から授業数が再び週 25 コマとなっても、全教科対応を維持するため、これまで平日に組み込んでいた総合学習を月１～２回、土曜日の午前中にまとめます。60 分授業では 25 コマに総合学習も含まれていたため、教科授業は実質 23 コマでしたが、今回は平日の 25 コマをすべて教科授業に充てることができます。

「教科横断的な学力の土台をつくるのが、総合学習です。現行では、他教科と同じく 50 分ですが、これでは物足りないと思うことがありました。例えば中２の『いのち』がテーマのプログラムでは、新生児集中治療室（NICU）に勤務する医師の話を聞くだけで時間がいっぱいになり、それに対する生徒のアウトプットは講演の感想文で終わりでした。土曜日の午前中をフルに使うことができれば、プログラムの充実が期待できます」（玉木先生）

もはや世界各国で行われる「模擬国連」の常連校となった洗足学園。文化の異なる高校生たちと実際の国連さながらに、議論を展開します。

一方、午後は任意で受講する「教養講座」を用意します。今年度試しにいくつか講座を開いたところ、哲学の講座に中高併せて 30 ～ 40 名集まるなど上々の反応です。日本経済新聞主催の「円・ドルダービー全国学生対抗戦」には中３から高２までが多数参加し、中３のチームが全国２位になりました。あるいは、兼部が可能な洗足フィルハーモニー管弦楽団に参加するもよし、企業主催の中高生向けセミナーの他流試合で学外活動するもよし。「土曜日は、基礎知識をつなげる実学的な学びの機会として、フレキシブルに活用してほしいと思います」（玉木先生）

陽光差し込むカフェテリアは、生徒たちお気に入りの憩いの場！昼休みや放課後には軽食も販売されています。

大学受験は今の成績だけで決めない 成績下位でも難関私大に現役合格 目標達成に学校が全面支援

洗足学園の今春の大学入試は、東京大学６名をはじめ国立最難関への合格者をこれまでで最も多く輩出するなど、進学実績を順調に伸ばしています。さらに、海外大学への進学についても、オーストラリアの名門大学であるモナッシュ大学やロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ校をはじめとした大学に合格しています。

ただ、大学合格は「自身のライフデザインのための中間目標」というのが洗足学園のスタンスです。「目指す大学は、今の成績で安易に判断せず、自分で限界を作らないようにアドバイスしています。実際、成績が下位でも難関私大や国立大学に現役合格している生徒がいます。大学合格は、成績以上に、目標の大学に『入学したい』という思いがどれだけ強いか、将来のビジョ

修学旅行（中３）では大分県にある立命館アジア太平洋大学を訪問。各国の留学生たちとワークショップに取り組みます。

ンを明確に描けるかどうかにかかっているのです」（玉木先生）

目標が定まれば学校は全力でバックアップします。玉木先生は、「家庭学習や学校の自習室での自習、昼休みや放課後に教員に質問するなど、授業の内容をきちんと消化できれば大丈夫」と太鼓判を押します。放課後に進学講習も設けており、こうした面倒見のよさが進学実績に結びついているのでしょう。

海外大学も「大学進学の選択肢の１つ」という位置づけです。それは、海外大学に進学する生徒が、帰国生よりも一般生の方が多いことからもわかります。「本校の対話型授業は、国内大学だけでなく海外大学でも通用するだけの学力を担保します」と玉木先生は胸を張ります。

海外大学への進学は高いモチベーションが必要ですが、洗足学園ではそのきっかけになるようなプログラムを提供しています。最初のきっかけとなるのが、中２が全員参加する２泊３日の「USA サマーキャンプ」です。そこで多くの生徒がうまく伝わらないことへのもどかしさを感じます。「もっと話したい」とやる気になった生徒には、中３から参加できる海外留学や海外語学研修があります。海外語学研修は、アメリカ研修とイギリス研修、2013 年度から始まった「IVY 研修」があり、IVY 研修はハーバード大学・イエール大学の大学生とディスカッションする機会があるのが魅力です。海外大学に進学した生徒は、こうした研修をステップに世界へと飛び出しています。

生徒の人生を豊かなものにしたい！そんな想いから生まれた「楽器修得プロジェクト」♪。洗足学園ならではの恵まれた音楽環境と優れた講師陣が、生徒の感性を高め、情操を磨きます。

生徒が立ち戻れる“人生の母港”として卒業生の就活支援も手がけ 6 年で終わらない学園づくりを目指す

将来のビジョンを明確に描くためのキャリア教育は、単なる職業紹介では意味がありません。自分の人生をどのようにデザインするか、生徒に考えてもらうにはいろいろな生き方があることを示すことが重要です。洗足学園では、父親だけでなく母親のキャリアガイダンスも実施しているのが特徴です。「母親によるキャリアガイダンスでは、子育てが一段落して再就職を果たしたお母様達に、どのような選択をして今に至ったのかを語っていただきます。母親が結婚や出産など人生のイベントにスポットを当てるのに対し、父親は世の中のトレンドに注目します。切り口が違うのでどちらも興味深く聞くことができます」（玉木先生）

また、“人生の母港”としての学校づくり「Mother Port School」構想は、洗足学園の先進的な取り組みの１つです。これまでも「成人を祝う会」や「30 歳の会」などホームカミングデーを実施してきました。特筆すべきは、卒業した大学３年生を対象に、在校生や卒業生の保護者の協力を得て開催している「就職活動支援セミナー」です。なかでも約 30 の業種による個別相談は、１回 30 分、最大３つの業種の方と話ができ、学生にとってうれしい機会となっています。約 60 名が参加して「もっとやってほしい」と好評でした。このように、学校と生徒、さらに保護者や卒業生が一体となって取り組む洗足学園のチャレンジに、これからも目が離せません。

運動系のクラブ活動も盛んな洗足学園。苦楽を共にした友人はきっと一生の宝物になるはず！（左は剣道部、右は新体操部）